



医療行政に対する意識の違い、医療関係者の内情、そして医師派遣のシステムとその実情。今までは、県立病院で医療局に申請もしくは陳情すれば、どうにかなるのではと考えていた。医療改革により大学病院などのシステムが変わったのは承知していたが収拾のつかない所まで来たのかと実感した。

この問題に対応していくには、町単独のレベルでは難しいと思うが、地域住民のためにやらなければならぬことである。町民が同じ意識をもって取り組まなければ打開できない問題である。

首長が英断を下す時期が近づいていると思う。

佐藤 照彦 議員

県立病院の医師確保など医療の充実、県が一生懸命取り組んでもらわなければならぬ。

同時に、県立病院がなくなれば地域住民が困るので住民も行政も、病院もそれぞれ自分のこととして頑張らなければならない。

「首長の本気度と決断だ」
「今、求められているのは行政・市民・病院が正三角

形にならない。これを維持するような医師確保対策をしなければならぬ」ということを遠野で学んだ。

町長、議長に本気を出させ、住民を「山田病院と地域医療を守る会」に結集し、山田病院と地域医療を守るため、全力を上げる決意である。

佐藤 忠暉 議員

7月初旬遠野市に医師確保対策の取り組み状況を視察にいき、医療整備室室長から、約90分説明を聞き大いに参考になり、心に感じた事柄をいくつか列記します、

- ①まず首長の姿勢いかによるといふことだ。首長がどれだけ医師確保を望んでいるかということだ。
- ②首長や病院長が、とかく県医療局の顔色ばかり考えて医療局の言うままになつていないか。
- ③首長が病院および医師にどんな応援施策を考えているか。
- ④県で医師が配置できないなら町が配置するしかない。町が資金を用意して医師を雇う気持ちがある

かということだ。

⑤首長が本当に真剣に医師確保を望むなら、その思いを全国へ発信していいのではないか。もつと医師へのPR、アプローチをしてもいいのでは？

木下 志き子 議員

遠野市の医療を守る姿勢は、行政と市民と病院が正三角形の形で維持することが大切であると提示している。医師確保のため地域の人々が知恵を出し合い「この地に住んで見たい」と思われるように地域の特性をアピールしたことは大きな努力であったと思う。長期にわたり弛まぬ努力の積み重ねが実を結んだことをたたえる。医師不足という現実はずいぶんお膳立てもかなわない。医師と医療関係機関に対して我々がその労に感謝の意を忘れたりしてしまふようでは何も成り立たない。そして、患者は何時でも受診できるという自己本位な意識をもつてはならないことも大変なことであろう。医師、医療関係者を支え、守る地域住民のありべき姿を問われたとき、

わが町は、どのように臨むべきかを決めなければならぬと思う。県立山田病院の存続のために今後も活動をおしまない。

三ヶ尻 隆雄 議員

遠野市の県立病院が医師充足率を達成しているが、過去には、県下で医師充足率最下位のときもあったとのこと。その後「医療、福祉、健康、出産、育児」全てに安心できるまちづくり

に取り組み、現在は病院長を先頭に、市、市民が一体となり、医師確保のため県立にもかかわらず、市の予算を使い積極的に行動している。医師の招へい条件は病院と行政、住民が互いに理解する上で正三角形の関係が大事だとのことであった。本町においては、毎年県の医療局に医師確保の要望してきたわけですが、近年の医師不足の現状からみれば配置してもらえないわけがないと思う。今後、本町においても常識にとらわれず、遠野方式を研究する必要があるのではないかと感じた。町の良さ、魅力を全面にアピールし、あらゆるアイデアを募りホームページ・チ

ラシなど最大限利用して活用すべきだと思う。

吉川 淑子 議員

遠野では、市民診療整備室を立ち上げ、医師確保のため乗馬の無償貸与（馬一頭あげます）とかで話題となったが「馬の話はうまくいかなかった」と初めに説明があった。

遠野市が生き残ったのは、医局に頼らない「貴田岡院長が今までの長い付き合いの中から医師との交流を介して医師をつれてきていく」とのこと。行政側は新しく来てくれる医師の要望を考えを聞いて、例えば、寒さや住居など不安の解消、奥さんの要望（農業Ⅱ家庭菜園）土地や技術の提供、協力を約束、医師であるまにえに住民になるので地域のみなさんが医師やその家族を全面的に支援していくことが大事であり、住民は病院を助ける市民団体であるべきである。

山田の場合、山田の魅力をPRし、船つり、お祭りお神輿かつぎ参加、カキ、ホタテ食べ放題とか、山田の魅力を活用していくことが考えられる。